研究題目

探求・共創する学び
－メディア・リテラシーを取り入れた学びのデザインと実践－

渡邉輝幸

要約

学校教育へのメディア・リテラシー導入の意義と実践，今後の展望

ここ数年，拙者は小学校におけるメディア教育の可能性を追求してきた。今回は，その形成過程で得たメディア教育の実践事例を紹介していきたい。その実践の核となるのは学校教育でのメディア・リテラシーの導入と成果である。

メディアを取り巻く昨今の技術革新は，社会におけるコミュニケーションと知識の相互作用のパターンを急速に変容させている。このような転換点にあって，教育現場でも，その特性に踏み込んで，学びのあり方を問い直していく必要がある。今こそ学びそのものをパラダイム転換する好機である。そこでメディア・リテラシー（＝メディア社会に生きる力）を取り入れた学びのデザインを構想した。

21 世紀に向けて着々と進行している高度情報化社会 (メディア社会) は，私たちの生活様式を一変させる可能性を秘めている。情報化の進展に伴い，私たちが扱うことのできるメディアも多様で日常生活のいたるところに入り込んできている。そのためにも子供達が多くの情報の中から，必要なものを選び出し，自分の考えに沿って関連付け，作り直し，自らのものとして表現・伝達していく力（メディア・リテラシー）を獲得していく学びを学校教育で導入する意義は大きい。

さらに，メディア・リテラシーは，単なるメディアの読み取り能力というスキル面に留まらない。社会を創造する人間形成やコミュニティの再構築に踏み込んで実践していくことで，メディア・リテラシーは「生きる力」とは何か，という回答にもなるだろう。

このような実践報告を通して，本校が進めてきたメディアの読み取り能力・メディア活用能力・コミュニケーション能力育成の実践を通して示そうとしている新しい学びのデザイン，豊かな人間形成を目指す学校像を示していきたい。

勤務先　福井市円山小学校　e-mail teruwata@kidsmail.jeims.co.jp

１　いかにして個性とメディアを両立させていくか

個性とメディア，個性とコンピュータというと，相反するものとして捉えがちである。アナログとデジタル，リアルとバーチャル…という捉え方もある。両者をどのように両立させていったらよいのだろうか。

(1) 本校の出発点　個性豊かな児童の育成をめざして

本校では「生命を尊び自主と創意に満ちた人間性豊かな児童の育成」を教育目標に掲げている。この目標に迫るために，子供一人一人を個性豊かな人間として尊重し，多面的な見方やとらえ方を生かす手だてを検討している。また，個々のよさや可能性を認めながら，共同で創り出す喜びを実感できる活動が展開されるような方策を明確にしていく必要がある。このような実践の積み重ねによって，積極的に社会に参加する子供が育つという認識のもと，研究に取り組んでいる。

平成６年度に，視聴覚教育の研究委嘱を受け，コンピュータを２０台導入して以来，本校の子供の実体験や生活経験を生かしながら，効果的にメディアを活用する授業づくりが始まった。また，コンピュータを始めとするメディアを学びの道具，表現の道具として子供の主体的な活動に役立てる活用方法を探ってきた。

平成７年度には，副主題として「視聴覚メディアの活用を通して」を掲げ，視聴覚メディアを学習過程の中に多く取り入れた授業の研究を進めた。視聴覚メディアを子供自身が使うことにより，学習内容や表現の幅が広がり，自学を促進する子供達の姿が見られるようになった。

平成８年度には，「学校教育におけるマルチメディア通信ネットワークの利用実験」実践校の委嘱を受け，新たに２０台のコンピュータが導入され，インターネットへの接続が可能となった。また，学校のホームページを開設し，学習成果や学習の様子を発信することが可能になった。インターネットへの接続により，調べ学習の情報収集の手段としてホームページを検索したり，電子メールで意見を求めたりと，新しい学習方法を得ることができるようになった。

(2) 先生達のこだわりがメディア教育の転換点！

このように，本校の研究経緯を見る限り，順調にメディア教育が進んでいったように見える。しかし，拙者が着任した平成９年度…。最初の研究推進委員会で，意外な発言が相次いだ。「コンピュータばかりやっていて，いかがなものか。」「学校は子供を育てるところ。それを忘れてはいけない。」等々…。不思議な感じである。コンピュータを否定しているように受け取れる。しかし，ここにメディア教育を進めていく上での重要な示唆が含まれていた。すばらしい先生達である。先生達はコンピュータ自体を否定したのではない。単一な機械的な操作になりがちな学習のあり方を問題にしていたのである。情報教育の流れで言えば，機能面より情意面を重視した情報教育への転換を指向する議論が行われたということになる。

では，この答えとなるメディア教育の方向はあるのだろうか？答えはイエスである。個性とメディアを両立するためには，メディア教育のイメージを転換していく必要がある。

(3) 保護者も同じ願いをもっている

これに関連して，興味深いアンケートの結果がある。本校の保護者に，子供達にどのような力が育ってほしいかをアンケートしたところ，「子供達のパソコンの活動や操作に驚いている」が，「パソコンの操作がうまくなってほしい」という回答はごく少数で，「創造的な表現手段としてのメディ

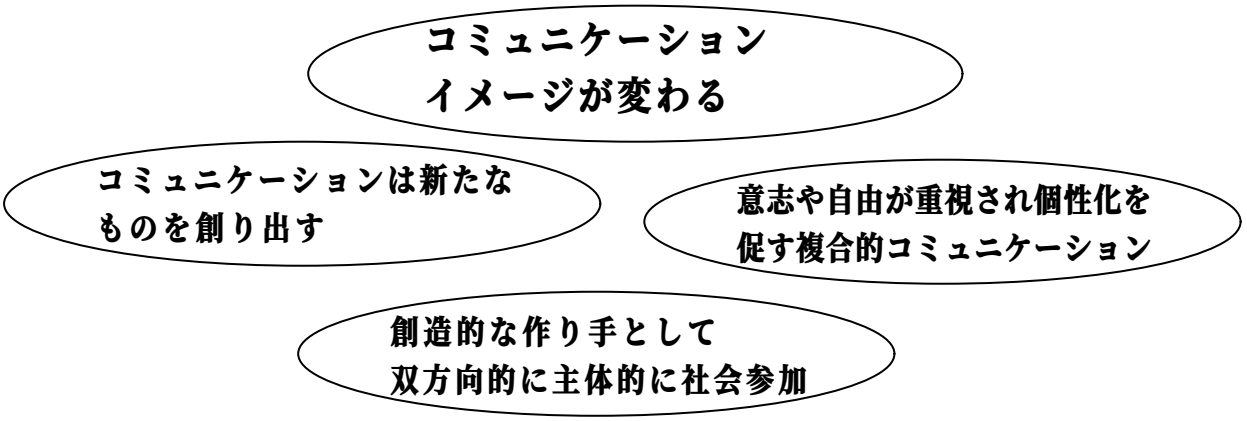
ア活用ができるように」なることを求める保護者が多数であった。保護者の言葉を引用すれば, 保護者は「これからはパソコンがあるのが当たり前」なので,「様々なメディアを使い, どう表現していくか」考え,「形にとらわれず子供の自由な発想を刺激するツール」としてパソコンを役立ててほしいと願っている。これからのメディア教育を考えていくとき, これらの教師や保護者の共通した願いを実現していくイメージが必要となる。

(4) 個性とメディア両立の鍵はコミュニケーション

その答えとして, 提案したのがコミュニケーションであった。

■両立の鍵とした理由

- コミュニケーション活動は子供にとっても教師にとっても明示的であり, 生活経験を伴って具体的場面を想定しやすい。
- コミュニケーション活動で見られる暗示や類推は, 子供の自然推論を表出させ, 文脈依存や状況依存といった特性を単元構成に生かしていくことができる。これは教師の状況判断においても同様である。
- コミュニケーション自体が情報の伝達や解釈, 再構成を伴う過程であるので, 活動全体をつなげる活動になりやすい。
- インターネットに象徴される双方向の伝達性等, 新たな情報革新が示すコラボレーションやマルチメディアコミュニケーションへの足がかりとなる。



上の図に示すように, 本校ではコミュニケーションを単なる伝達手段としてではなく, 創造的な活動ととらえている。コミュニケーションのとらえ方は, メディアの発達と共に変化してきているが, 近年の急速なメディアの発達は, 私たちに多様な伝達の選択肢と発信の手段をもたらした。インターネットでは大人も子供も同じ立場で情報を発信したり, 遠くであっても双方向でやりとりしたりすることが可能となった。学習活動で発信を行うとき, 発信するものを創り出していく過程での子供達同士の教え合いや学び合いをすることにより, 相手を意識した受信や発信のとらえ方の学習にもなり, 受信者を意識した活動となる。発信を行う過程が新しい見方・考え方を育てたり, 新しいものを創り出していく過程と捉えている。

2　メディアを活用したコミュニケーション構想で両立を

メディア教育でコミュニケーションを柱にした活動を取り入れるということは,子供達が接する様々な体験や，人との関わり，ものとの関わりが，学習の場になるということである。この実体験と連動したメディア活用がいよいよ始まった。

(1) メディア活用とクロスさせたコミュニケーション活動の構想

まず,平成１０年度に研究主題を「一人一人の思いが輝き　共に創り出す学校」,副主題を「メディアを活用したコミュニケーション活動を通して」と変更し,平成１１年度には図１に示すような活動を構想した。

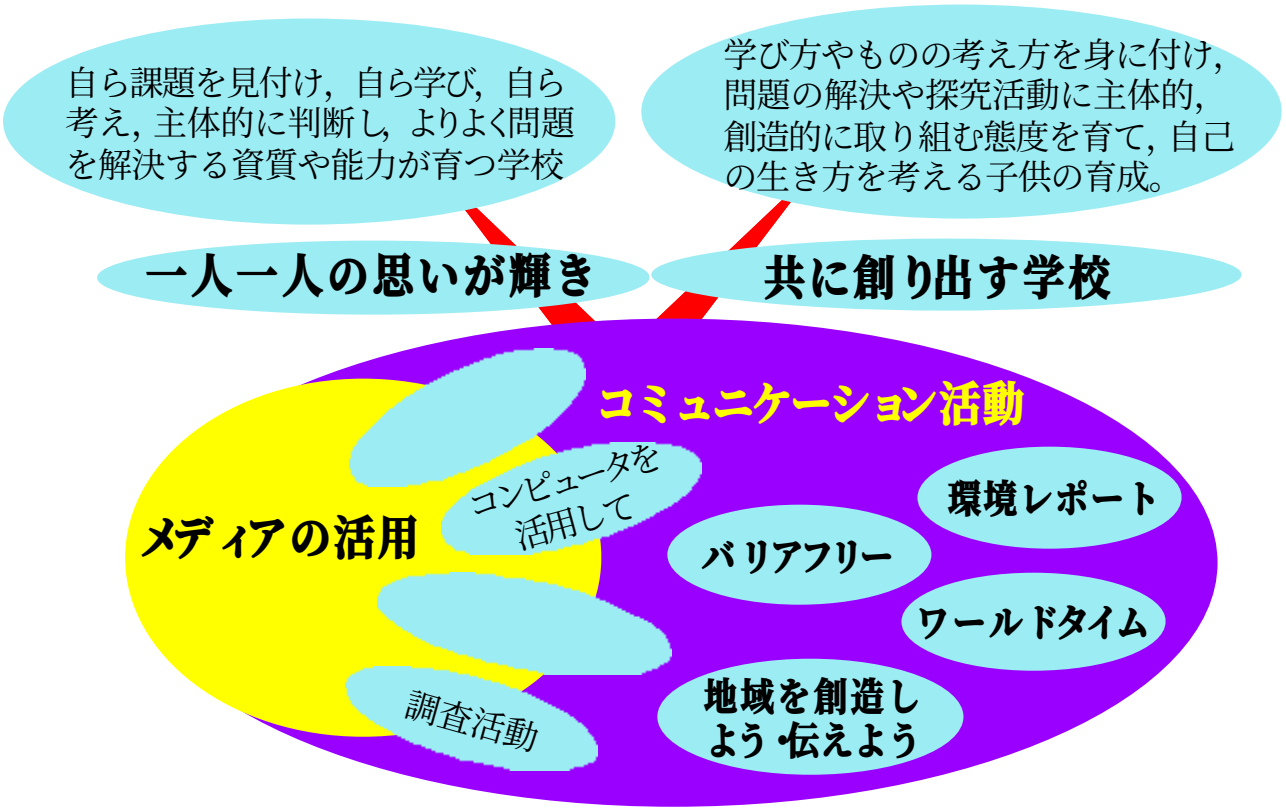


図１　メディア活用とコミュニケーションをクロスした学びの構想

図１では，メディア活用とコミュニケーションをクロスして活動を構想していく単元構想がイメージできるように，両者を視覚的に位置付けた。そして，教科や総合的学習のベースとなるメディア活用能力の育成と，教科や総合的学習での探求を広げながら，コミュニケーション活動を指向するデザイ

図２　段階毎の活動の見通し

	メディア	コミュニケーション活動
低学年	体験や交流にデジカメを活用。お絵かきソフトなどでメディアに慣れ親しむ。	五感を通して触れ，共感する活動を重視。 生の体験や交流。地域の活用。
中学年	マルチメディアポスター製作など，アピール性を高める。 ビデオの活用。 ローマ字入力の技能育成。	県や市の施設の情報や人的ネットワークを生かして調べたり，見学したり。低学年よりもテーマ性をもった交流。
高学年	インターネットや電子メールでの情報収集・情報加工。ホームページなどでの発信。卒業ＣＤ等での総合表現。	テーマを決めてグループ毎に共同で作品を作るなど，継続的な交流。電子メールやテレビ会議を活用した交流・相互学習。

ンとして示している。

図３　各学年で取り組んだメディアを活用したコミュニケーション活動例(平成１１年度)

あきランド　１年生

探検に出て，いろいろ見つけたよ，小さい秋を。楽しかった遊びや見つけたことをコーナーにして，いろいろなお店をつくって楽しみました。

チャレンジしたよ「すてきな町円山」　２年生

民謡，組み紐，たいこ，木工，読み聞かせ…。ボランティアの人との交流で，いろいろチャレンジ。

ボランティアクラブ「やさしい町円山」　３年生

わたしたちでボランティアクラブをつくろう。さわやかクラブ，手話で話すクラブなどいろいろクラブをつくったよ。保育園の子と交流したよ。

せかいの人と手をつなごう　４年生

いろいろな国のお友達のことを調べた，わかった，気が付いた…。世界の友達のことを音楽で紹介しよう，伝えよう。

お米から数の世界へ　５年生

年間を通した直接体験の中で数量的な世界に関わり，調査，表現。わかりやすいようにグラフにしたり，まとめたりしました。

卒業ＣＤ制作中　６年生

デジカメやコンピュータを使って，６年間の思い出を卒業ＣＤに表現していく活動。

さらに，発達段階にあわせて，低学年，中学年，高学年毎のメディア活用とコミュニケーション活動の構想を立て，実践の見通しを立てた。（図２）

このような構想のもと，各学年でメディアとコミュニケーションをクロスさせた活動が始まった。

平成１１年度の実践を通して，次のようなことが明らかとなった。

①　コミュニケーションをイメージした活動構想

各学年で様々な集団の関わりの中で練り合う過程が設定された。表現する相手を明らかにし,目的をもって表現する場面設定の工夫としてコミュニケーションイメージが役立ったと考えられる。

②　教師や子供のリソースを引き出す働き

コミュニケーションを視野に入れることで,教師や子供のリソースが引き出される。この点は非常に重要である。教師はメディアとクロスしながらコミュニケーションイメージを構築する過程で,従来のコミュニケーションと,新しいコミュニケーションの概念の双方を類推できたため,自身の教科や領域のリソースや学習方法を見直し,構成し直し,広げることができる。

子供においても,活動が実体験と連動したり,比較したり類推したりする場面が多く取り入れられた活動の中で,生活経験を想起したり,状況の文脈を読み取って関わる場面が増えてきた。能動的な学びを指向し,イメージ形成を図るには暗示と類推がきわめて重要なことが改めて確かめられた思いである。

③　メディアの特性理解や活動意欲の高まり

したがって,教師も子供も自身のリソースと関連させて,メディアの特性理解と他の事例に転用させようとする活動意欲の高まりが見られるようになる。

3　そしてメディア･リテラシーにつながった

前節で示したように,メディアとコミュニケーションをクロスさせる学びの構想は,コミュニケーションのパラダイム転換を促進しながら,教師や子供がもっている(国語的コミュニケーションイメージなども含んだ) リソースを引き出し, 活動への見通しやメディアの特性理解を指向する。メディア・リテラシーにつながる道筋が見えてきた。

(1) メディア･リテラシーとは

メディア･リテラシーという概念は近年導入された概念である。メディア･リテラシーは,メディアの読み取り能力育成とコミュニケーション指向の両面を備えている。この点は,本校で平成９年度より構想した学びのパラダイム転換(－メディアの変革に伴うコミュニケーションの質的変化が学びそのもののあり方を変えようとしている－) を根拠としている点では, 同質のものである。ここ10年来の学びの提言を分析するだけでも導き出される回答であり,その示し方が本校のような,メディアを活用したコミュニケーション構想であっても,メディア･リテラシーであっても大差はない。

しかし,学校教育にメディア･リテラシーを導入するには,考慮しなければならない課題がある。

①いきなりメディア･リテラシーでは…

様々なレベルで, 新しい学びが提言されている今, 豊かな人間形成や確かな体験の重要性は,一見するとメディア教育とかけ離れているように見える。本校のようにコミュニケーションを鍵としたパラダイム転換のイメージを共有するとよいだろう。

②クリティカル･シンキングがすべて？

日本で紹介されたメディア･リテラシーとしてカナダの例が有名である。同時にクリティカル・シンキング（批判的思考）も紹介され, メディア・リテラシー＝クリティカル・シンキングという見方もある。カナダはアメリカのメディアの影響から自国の文化を守るという明確な目的をもって学校教育に導入したが,日本には日本のメディア･リテラシーが育ってよい。「クリエイティブでファン」なメディア・リテラシーも指向していきたい。

③スキル面を重視しすぎると…

メディアの読み取り能力の育成が目標であるが,もう一方のコミュニケーション指向を考慮しないと,スキルや機能を何となく自慢する実践者を増やすことにはならないか。メディアを取り巻く昨今の技術革新は,社会におけるコミュニケーションと知識の相互作用のパターンを急速に変容させている。単なるメディアの読み取りスキルに留めず, 社会の創造やコミュニティの再構築を指向する人間形成に踏み込んだものであることを忘れてはならない。

これらの面を考慮して, 本校でのメディア・リテラシーの捉え方を示す。なお, 今回は実践報告が主であるので, 捉えについてはここで示すに留めておく。

21世紀に向けて着々と進行している高度情報化社会(メディア社会)は,私たちの生活様式を一変させる可能性を秘めている。情報化の進展に伴い,私たちが扱うことのできるメディアも多様で日常生活のいたるとことろに入り込んできている。このようなメディア社会を生きていく子供達には, 多くの情報の中から, 必要なものを選び出し, 自分の考えに沿って関連付け, 作り直し, 自らのものとして表現・伝達していく力（メディア活用能力）が必要になる。

このようなメディア活用を柱とした新しい学力をメディア･リテラシーという。リテラシーとは読み書き能力のことであり,メディアに関する読み書き能力がメディア･リテラシーである。メディ

アリテラシーとはメディアを読み書きする能力のこと。
これまでのいわゆる読み書きそろばんの既存の学習で得た学力に加えて，２１世紀にはメディアを読み書きする能力（メディア・リテラシー）を学力として育てていくことが重要である。本校では，このような考えに立って，メディア・リテラシーを育てる情報教育，総合的学習を実践している。メディア・リテラシーがメディアを読み書きする能力を育てる点から，本校では次に示すような２つの要素をクロスしながらテーマ設定や技能目標設定を行っている。

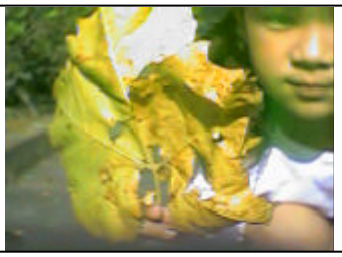
本校のメディア・リテラシーの特色１：テーマ性を高めるコミュニケーション活動（ネットワークのように共同で学ぶコミュニケーション能力の育成）
本校のメディアリ・テラシーの特色２：創造性・探究心を高めるメディア活用（総合表現を支える技能育成）

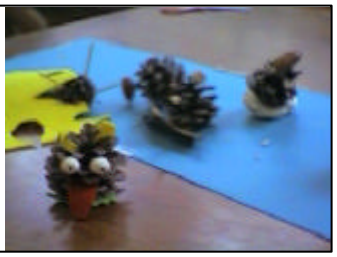
(2) メディア・リテラシーの第一歩　－実体験と連動させたデジカメ活用－

メディア・リテラシーを育てるために，具体的手だてを構想した。平成10度より特に低学年でのデジカメ活用を図った。デジカメなどのツールの発達は，子供の能動的な活動の可能性を広げている。本校ではデジカメは単に記録するだけのものでなく，子供の視点を広げる双方向のコミュニケーションツールであると捉え，低学年から積極的に活用した。

■デジカメの活用例　１年「あきランド」

探検に出て，いろいろ見つけたよ，小さい秋を。楽しかった遊びや見つけたことをコーナーにして活動。





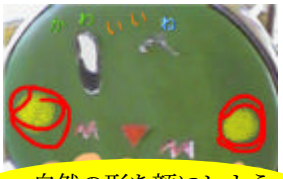
■デジカメの活用例　２年「円山たんけん」

町探検で子供達が見つけたものをデジカメで記録。ユニークな場所を撮影したり，子供達の視点で出来事を記録したりした。

このように本校では，低学年のデジカメ町探検に始まり，様々な活動で子供達の視点を広げたり，体験を再現したり検討したりするツールとしてデジカメを活用している。このような子供の思考を刺激し，発想を生かすことのできるメディア活用を繰り返すことで，メディア・リテラシーの育成を図り，メディアを道具として活用する子供が育っていく。「うなくなったの！」と１年生の先生が子供が撮影した場面を見て感心しているのが印象的に残る活動である。

低学年のメディア・リテラシー

体験と連動したデジカメ活用
メディアの遊具性を学びに生かす



自然の形を顔にしよう

いろいろなものをデジカメでとると　おもしろいよ

デジカメでとってペイント

(3)ナレーションはコミュニケーション

－中学年のメディア･リテラシー－

全学年でメディアを活用する取り組みが見られたが,活用するときに共同で作業する姿が本校のメディア活用の特色である。デジカメに加えて, 中学年では, メディアを活用したナレーション入力を進めているが, 特に声を録音するときには, 一人がマイクで声を入力し, もう一人がマウス操作をして録音の開始や終了をマウスで操作する, といった具合である。ナレーション活動を通していろいろなコミュニケーションが見えてきた。

中学年のメディア・リテラシー

遠足の４コマレポート

遠足で撮影したたくさんのデジカメのデータから４枚を選んでワープロに貼り付け,ナレーションを書き込む。そして，マイクを使ってナレーションをパソコンに入力。

メディアの作り手になって情報を選択したり，並べたりする。

協力してナレーション

パソコンの操作はいつも一人１台がよいとは限らない。声をマイクで入力するときは,機器を操作する者と,ナレーションする者が協力しあう。内容を一緒に考えたり, 聞き直して検討したり。メディアは連携し, 役割を吟味し，作り上げていくもの。

ビデオにナレーション

さらに高学年ではビデオ制作を通して,映像のメディア・リテラシーを図っている。

子供達の実体験を素材にしたり，学年のテーマに沿ってビデオを制作したり。

特に今年度はビデオなど映像の読み取りや制作が盛んに行われた。

(4) 映像の読み書き能力を高める
－ビデオ編集にチャレンジ－

６年生の総合的学習「ワールドリサーチ」で番組制作

平成１１年度　嶋田千春

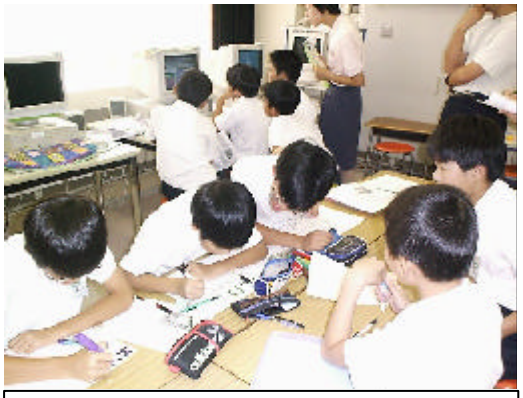
世界のことを子供達の視点で探究する活動「ワールドリサーチ」では、子供が選んだテーマで調べたことを、最終的にビデオ番組にまとめ、全校参加の「ワールドタイム」で紹介した。

「世界のくだもの」インタビューを撮影中　パイナップルの思い出は？

「日本にやってきた魚」ワープロソフトでブラックバスレポート作成中

「世界のおかし」おかしのふくろ集めビデオでクイズを作っていったよ

「オーストラリア」インターネットで情報収集　いろいろな情報を集めました



「世界の建物」　掲示物の作成　内容を再構成してポスターを制作中

「イタリアの食べ物」　撮影の打ち合わせどの資料を大きく見せようかな？

(5) メディア・リテラシーで総合表現　－６年生の卒業ＣＤ－

活動の流れ

インターネットで修学旅行先を調べる

旅行計画づくり

デジカメ・カメラ・デジビデで修学旅行の記録

ワープロで修学旅行新聞

HTML ホームページづくり

卒業ＣＤという共同制作の活動設定の中で,各クラスが取り組んだ活動を思い思いに表現しようと,年間を通したテーマで,メディアを活用したコミュニケーション活動を発信していく。平成１０年度より取り組み始め，今年で４年目を迎える。

平成１１年度の実践より

６年間の思い出をたくさん詰め込むことができる卒業ＣＤでは,マルチメディアの特性を生かして,子供一人一人がオリジナルの卒業文集や写真･ビデオアルバム,音楽の部屋などを創っていける。インターネットのホームページと同じＨＴＭＬ形式で制作していくため,一度作り方を覚えたら,いつでも,どれだけでも子供の発想を生かしたページを追加できる点が卒業ＣＤのすばらしいところである。

プロジェクト１

まずは修学旅行を素材にマルチメディア新聞やホームページを作ってみる。修学旅行で撮影したデジカメの画像を実際にホームページにしていけることがわかって,デジカメに対する興味も増した子供達。こんな時に子供の創造的活動に役立てようと購入した18台のデジカメが役に立つ。

卒業ＣＤ制作の過程で,デジカメで記録した画像をパソコンで処理したり,レイアウトを工夫する楽しさを味合う中で,様々な表現方法にチャレンジしたりするための情報活用能力が必要になる。この点からもメディア活用,情報活用能力の育成の集大成として，卒業ＣＤ制作は６年生の活動として最適だと考えている。

また,様々なメディアを活用することから,学年ＴＴで取り組むことで教師や子供の得意分野を生かし,１学期の内に全クラスの子供がホームページをつくれるようになった。

プロジェクト１

卒業ＣＤ制作の基礎能力の育成（学びの共有）

（探究の様式化）

環境レポート

メディアタイム

ワールドリサーチ

プロジェクト２・３

プロジェクト２･３　テーマの探究　テーマ毎に探究し創り出そう

卒業ＣＤはさらに,「自分達で創り出そう,創り出したものを残そう,広げよう」という目標をもっている。環境レポート，メディアタイムワールドリサーチの３つのテーマで，子供達が総合的学習で求められている今日的課題を探究した。

全員に公開するホームページ形式のＣＤ作成の中で，メディアの送育成し，モラルが育っていってほしいと願っている。このような活動が実際の映像の作り手になったときに行かせれていってほしいものである。

・総合表現としての卒業CD

－子供の自由な表現（発想）

→一人一人の部屋

教科・領域の学びの道筋の記述（思考・探究）

次ページに１１年度の卒業ＣＤの構想を示した。

環境レポート」

「メディアタイム」

「ワールドリサーチ」

総合的学習年間計画　　福井市円山小

{第６学年}　　（７０時間　修学旅行の時数は含んでいない）

月	単元名・内容		ねらい・主な学習活動
4 5	プロジェクト１ 修学旅行の思い出をまとめよう ワールドリサーチ　メディアタイム　環境レポート パビリオン	プロジェクト１ メディア活用 (10)	○修学旅行をテーマにマルチメディア新聞を創ったり、ホームページにする中で、卒業ＣＤ制作に必要な基礎的能力を育成する。 ※メディア活用を柱として、子供同士、教師と子供が相互に学び合う，学年ＴＴでの学びの共有の場である。 インターネットで修学旅行先を調べる → 旅行計画づくり → デジカメ・カメラ・デジビデで修学旅行の記録 → ワープロで修学旅行新聞 → HTML ホームページづくり
6 7		プロジェクト２ テーマの探究 (15)	○「自分達で創り出そう、創り出したものを残そう、広げよう」という目標を環境レポート、メディアタイム、ワールドリサーチの３つのテーマで、子供達の探究活動を通して地域や様々な事象に関わっていく。 ※総合的学習を通してテーマ毎に複線化して今日的課題を探究する学びの場である。(テーマ設定による学びの複線化の提案) ※テーマは学校や学年の実情に応じたテーマで、グループ編成は学級単位でも子供の関心に基づき学級を解いたグループでもよい。
8 9 10 11	ワールドリサーチ　メディアタイム　環境レポート	プロジェクト３ テーマの探究を深める・広げる (20)	○ここでは、プロジェクト２で行った子供の思い思いの探究活動を生かしながら、さらに深めたり、広げたりして課題探究を高める。 ビデオ制作で円山小のワールドタイムの番組制作に参加。 歴史カルタや円山宝探し、宇宙クイズの旅などの制作 デジカメ探検隊。ビデオレポート隊。インターネットで調べる。 ワールドリサーチ　６の３ 世界各国の自然・文化・習慣について自分たちのこだわりを多様なメディアで探究し，ひとつの番組に構成し，全校児童に発信していく。 メディアタイム　６の２ 子供の関心に沿ったメディア活用の過程で多様な表現方法を高める総合表現。メディア活用を通して未来に残すもの，未来を広げるものを探っていく。 環境レポート　６の１ 環境に対する子供の問題意識を大切にし，体験的な調査活動や実験，あるいはメディアを使った探究活動を共同で行い、実践化への意欲を高めていく。
12 1	プロジェクト４ 卒業ＣＤに思い出や創り出したものをまとめていこう	プロジェクト４ メディア活用 (15)	○一人一人の思い出やテーマの探究活動で創り出したものを卒業ＣＤにまとめ上げる。 ○音楽や図工とのＴＴを活用して、総合表現活動に取り組む。 ○メディア活用の能力を高める。 音とイメージで思いを表現する　アニメーションで表現を広げる　メディア活用を高める　スキャナーで写真の読みとり　手書きのイラストを加工する
2 3	プロジェクト５ コミュニケーションを広げよう パビリオン	プロジェクト５ 総合表現 (10)	○卒業ＣＤやテーマの探究で創り出したものを様々な相手と交流し発信する中で、未来に残していく、未来を創造する担い手としての実感と実践力を高めていく。 ○テレビ会議や電子メール、ビデオレターなどを通してメディアを活用したコミュニケーション活動をする。

(6) コミュニケーションの広がり・深まり

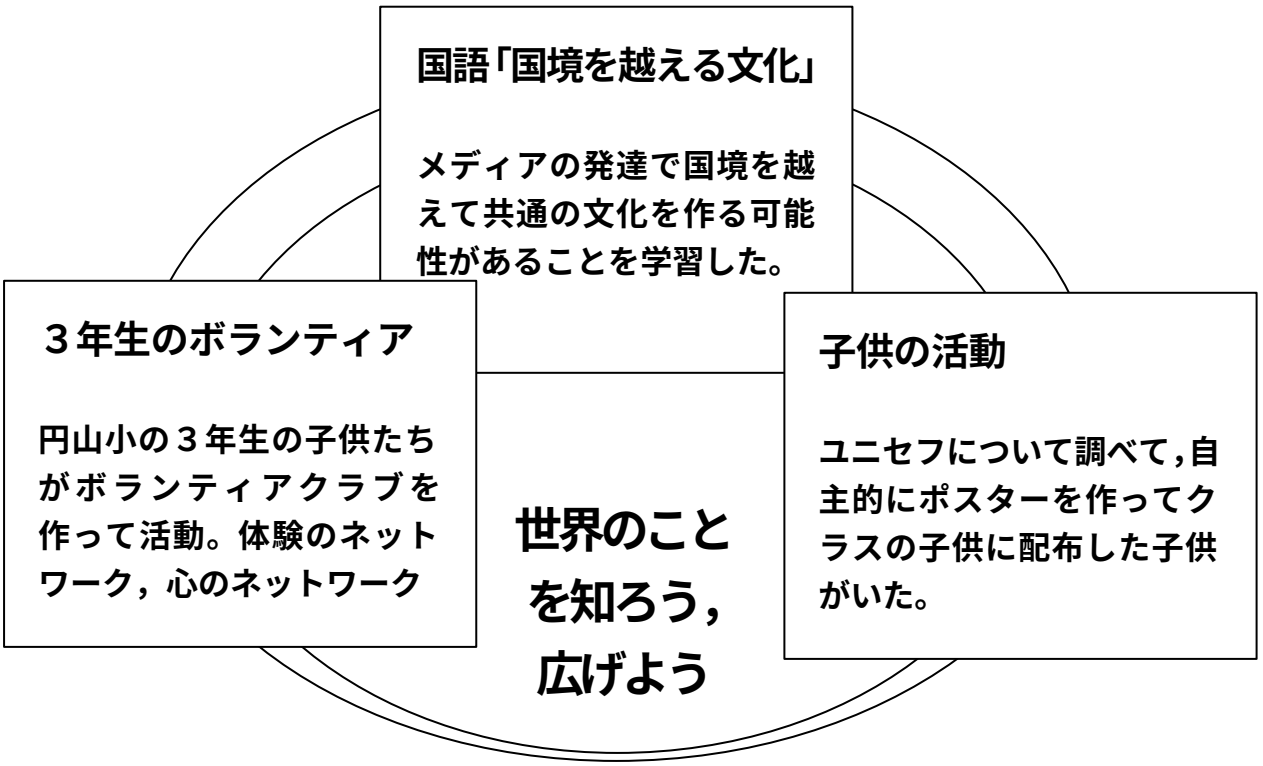
メディアを活用したコミュニケーション活動の中で体験のネットワーク,心のネットワーク,知のネットワークが子供の学びにつながっていく。本校では他の学年に活動が広がっていったり,学年が進むにつれてコミュニケーションが深められたり,様々な人と関わる中でコミュニケーションの深まりが見られるようになった。

学年毎に行っている様々な活動を,学校全体で発表したり,交流会を開いたり。コミュニケーションの広がりが, 学校全体に広がっていくことがある。４年生は「世界の子供達と友達になろう」と１学期からインターネットや図書館の資料で調べたりする中で,初めて世界の子供達に目を向けた。調べてわかったことをもとにメッセージを伝えようとする時, 世界の子供達の立場になって音楽劇で苦悩を表現したり, 音のリズムで様子を伝える工夫が見られた。

グループ毎に調べた外国の友達への音楽は, ４年生の学年集会だけでなく, 全校児童への発表会につながった。４年生の子供達のメッセージは世界の子供達の思いでもある。４年生のメッセージはユニセフの活動と外国の友達の様子を強く印象づけた。６年生でも休み時間にユニセフのホームページを調べて, 協力を呼びかける手作りのポスターを作った子供が見られた。３年生は自分たちでボランティアクラブを作って身近な地域との関わりを深めようとしている。

総合的学習ではこのように世界の人々に目を向けたり,立場の違う人と関わっていく心のネットワークや体験のネットワークが子供の学びにつながっていくことが重要であろう。また, 体験や心のネットワークの中で社会や自然との関わりを通して知のネットワークも育っていこう。子供の学びはこのような体験のネットワーク, 心のネットワーク, 知のネットワークの響き合いの中で育っていくことができる。

学年を越えて，ボランティアの心が広がる。
外国のことを知って心を痛め，共感する心が広がる。
４年生の音楽やメッセージを通して世界に目を向ける子供



手をつなごう　世界の子供達と

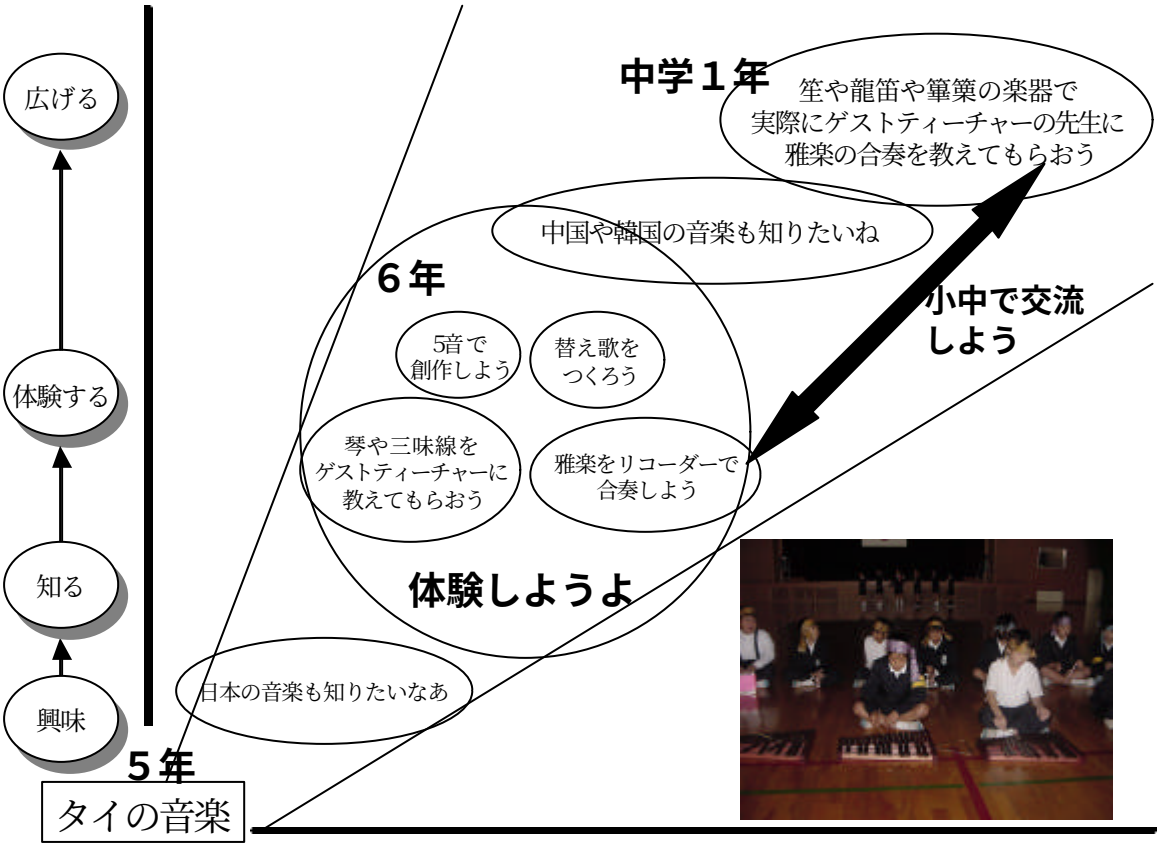
平成 11 年度　笠松八重（４年）　長谷川恵里（４年）　寺前公恵（音楽）

世界の子供達は幸せなのだろうか。世界の子供のために活動しているユニセフを知ろう。世界の子供達のことを知ろう。

地雷で足がなくなった外国の友達がいる。学校に行かずに働いている友達がいる。僕たちの思いを音楽で伝えよう。

音楽を通したコミュニケーションの広がり，深まり　平成12年度,13年度　寺前公恵

音楽という教科でもメディアを活用したコミュニケーションの広がり･深まりが見られた。平成11年度の４年生の活動が素地となって,12年度,13年度の音のコミュニケーションを通した活動につながっている。４年生で世界の子供達の心を歌で伝えようとした子供達が，５年生ではタイの国の文化や環境問題などに触れ，メディアを活用しながらその思いを表現した。６年生になった今年は，中学生の子供達と雅楽の交流をテレビ会議で実現した。



4　次のステップに向けて

このように本校で積み重ねてきたメディアを活用した実践をまとめると,以下のようなメディア・リテラシーの構想図ができあがる。しかし, これはあくまでもプランにすぎない。これまでも述べてきたように,本校で取り組んだ活動では教師や子供の持っているリソースが引き出され,実践を

	メディア	育てたい技能		コミュニケーション活動
低学年	体験や交流にデジカメを活用。 お絵かきソフトなどでメディアに慣れ親しむ。	パソコンを大事に使おうとするモラル面を育てる。 お絵かきソフト（きっどぴくすorスマイルペイント）に親しみながら，パソコンやマウス，タブレットの使い方になれる。 体験活動と連動させてデジカメに親しむ。	1年	五感を通して触れ，共感する活動を重視。 生の体験や交流。地域の活用。
		きっどぴくすとスマイルペイントのお絵かきソフトの使い方が一通りわかるようにする。 ファイルの保存や印刷ができるようにする。一太郎スマイルを使って，名前や短いメモを書くことができる。 全員がデジカメの撮影を体験する。	2年	
中学年	マルチメディアポスター製作など，アピール性を高める。 音声入力 ビデオ撮影。 ビデオの活用。 ローマ字入力の技能育成。	一太郎スマイルのテンプレートを使ってビジュアルな新聞作り。 アルバムの使い方がわかる。アルバムからコピーして他のソフトに貼り付けができるようにする。 サウンドレコーダーを使って，声を入れたり，ナレーションできるようにする。	3年	県や市の施設の情報や人的ネットワークを生かして調べたり，見学したり。低学年よりもテーマ性をもった交流。
		ローマ字を覚え，ローマ字でキーボードができる。 ビデオカメラの使い方を学び， パソコンで動画を加工して，ビデオを作ったりする。 スタディノートで英語	4年	
高学年	インターネットや電子メールでの情報収集・情報加工。ホームページなどでの発信。卒業ＣＤ等での総合表現。	音楽ソフトに親しんで，イメージと音楽を重ねた作品を作る。 わくわく！まるちらんどを使って企画したり，資料をレイアウトしてプレゼンテーションができるようにする。 電子メールやインターネット活用能力を高める。 情報活用のモラルを育成する。	5年	テーマを決めてグループ毎に共同で作品を作るなど，継続的な交流。電子メールやテレビ会議を活用した交流・相互学習。
		ホームページ作成ソフトを使って，総合表現。 歴史や国語など教科に題材をとって作品をつくる。 電子メールで他校の友達と交流する。 情報発信のモラルを育成する。	6年	

積み重ねるうちにさらに高められ，次年度はさらに進んだ取り組みに発展したり，指向したりするからである。実際平成９年度には初めて５年生で取り組み始めたマルチメディア新聞の手法が，今では３年生が当たり前のように作成し，視覚的にも内容的にもすばらしい作品を仕上げている。

また，コミュニケーションの広がりや深まりについても，新しい側面が見えてきた。全体を通して，地域を題材とした実体験と連動させる取り組みと，国際化に対応した取り組みが多く見られるようになってきたことである。そこで，今年度は国際化と高度情報化への対応をいっそう重視した

育てたい３つの「生きる力」

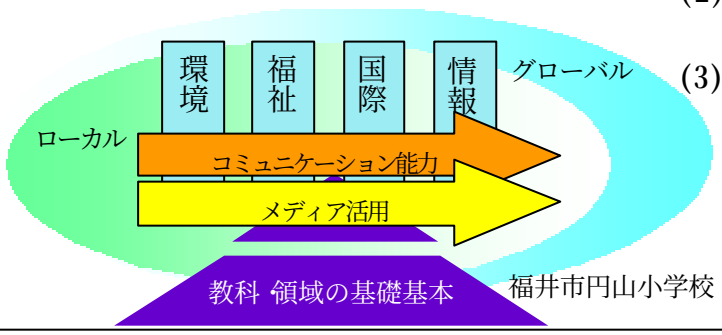
■地域に参画し，社会を創造する力
■メディア社会に生きる力
■国際社会に生きる力
□確かな基礎・基本

基盤となる力

研究主題
一人一人の思いが輝き　共に創り出す学校
研究副主題
－地域と共に広げよう　ネットワークコミュニケーション－

(1) メディア活用とコミュニケーション能力を学力として育て，その学力を生かして，
(2) 国際化・高度情報化・福祉・環境などを総合的に探究する。
(3) 課題の探究の過程で地域と共に体験のネットワーク，心のネットワーク，知のネットワークを広げたり,深めたりして豊かな心と社会に参画する心を育てる。

本校の学びのデザイン　知の統合・創造



福井市円山小学校

国際化への対応 ＝国際社会に生きる力を育てる

■ワールドタイム

水曜日と金曜日の朝の会全校で英会話に親しむ。

英会話等のコミュニケーション能力を高める

グローバルな視点での異文化理解，自国のアイデンティティ確立の両輪を伴った国際感覚を身につける

■英語活動（３～６年）

①国際理解教育の一環として，英語会話の学習を行う。

②体験的な英語会話の学習を通して，コミュニケーション活動を楽しみ，進んでコミュニケーションを図ろうとする意欲や能力を育てる。

環境問題など地球規模で考えるべき課題に対して，全地球的な一般性や地域的な特異性を見つける中で現状を把握したり，共感したり，改善への実行の意欲を育てる。

地域と共に広げよう
ネットワークコミュニケーション

PTAの支援で　ホームスティ

■生活科（１，２年）

町探検やお話会を通して，身近な自然や人々と体験を重ね，地域のよさに気付く。外国に転校した友達を通して国際交流を広げていく。

■総合（３，４年）

保育園の子やお年寄りなど，いろいろな人へのボランティア活動を通して,心と心,手と手をつなぎ合う大切さを体験していく。ローマ字の学習など，コミュニケーションの手段を広げる。

■総合（５，６年）

メディアを活用して英語辞典を作成。国際交流。身近なテーマから広げ,深め,グローバルマインドを育てる。

■ホームスティ

オーストラリアの小学校に本校の児童がホームスティし，生きた体験と感動を味わい交流を深める。

学びの構想を立て，全学年で取り組んだ。

5　世界の人とコミュニケーションしよう

ここでは, 国際化に対応しつつメディア・リテラシーを進めた実践をいくつか紹介していく。

(1) レッツ　ゴー　豪　ふれ合おう！　平成12年度　土橋洋子　佐島ひろ美　渡邉輝幸

平成１２年度に本校のＰＴＡが中心となって,円山っ子のオーストラリアへのホームスティが実現した。国際理解を進めるまたとない機会であったので, ４年生を中心に交流の準備を進めた。オーストラリアは, 日本と同経度帯なので時差が少なく, 一緒に授業をすることもできる。また, 日本語を教育に取り入れる学校が多いので,ローマ字を介した日本語のやりとりもできる。小学校での国際理解教育には適していると言えよう。

この活動では, 相手が外国の子供達と言うことで, 何を伝えるか, どんな交流をしたいか, そしてどんな方法で伝えるか, 子供と教師がいっしょになって考えた。

４月に子供達で決めたテーマに沿って,グループに分かれ,日本の文化や生き物,祭りや遊び,くらしや地域自慢などをまとめていった。ムールーラバ小学校の子供達は日本語を学習してはいるが,外国の人にわかりやすく伝えるには,やはりメディアを使ってわかりやすく表現することが重要である。

■ローマ字の学習中

■絵をかいてわかりやすく

■ビデオでわかりやすく

ホームスティには４年生からも７名参加した。ホームスティ報告会を開いて,参加した子供達の体験を聞いたり,質問をしたりして,情報を共有した。ホームスティで記録してきてくれた200枚を超えるデジカメのデータも学校のサーバーに保存し,自由に見ることができるようにした。

また,ムールーラバ小からメールを送ってくれたり,コンピュータルームからビデオ映像を送ったりするテストにも参加した。

■原住民の楽器

■未知の体験

この子のオーストラリアでの一番の体験は, 大きな大きなトカゲを頭の上に載せられてしまったこと。子供達の質問もトカゲの大きさに集中した。

子供達はたくさんのおみやげをもって帰ってくれた。
原住民の楽器や用具など,使い方を詳しく教えてくれたり, 歴史まで語ってくれた。

■ローマ字チャットで意見交かん

オーストラリアの小学校の子は日本語やローマ字を勉強しているんだ。
福井市教育委員会のダニエル先生が英語でお手伝いしてくださいました。子供達はチャットを通した交流で,それぞれのグループで調べていることに関連した質問をあらかじめ考えて準備していたが,「オーストラリアの子もローマ字をうつのがじょうずだ。」とか,「オーストラリアの子は秋休みがあるんだって。」とか,子供の視点で様々な情報を受信していたようである。また,子供達は質問をして,すぐに相手から返事が来ることに,電子メールとは違ったチャットの特性と魅力を感じていた。

■音楽や声のしょうかい

リコーダーのえんそうをコンピュータにろく音中
右の子は声のナレーションを聞き直してたしかめているところ
声や音楽をはりつけて，マルチメディアレポートだ！

■テレビカメラでビデオレター

カメラに向かって「おはロック」をダンス中！
オーストラリアにホームスティに行った子が,「おっは～」を広めてきたんだ。
パソコンカメラだから，編集したり，オーストラリアの子とテレビ会議もできるよ。

■日本の音楽もテレビカメラで

円山公民館の人達に教えてもらった「いっちょらい節」をテレビカメラでさつえいするグループ。リズムよくじょうずになったね！

■スタディノートでクイズを作ったり，プレゼンテーション資料を作ったり。オーストラリアの子にもわかりやすい資料を作ろう。このグループは越前和紙の昔話をローマ字とイラストで説明しようとしているところ。

(2) マルチメディア英語辞典を作ろう　平成12年度　土橋洋子　佐島ひろ美　渡邉輝幸
13年度　大野和子　渡邉輝幸　伊藤文雄

オーストラリアの子供達との交流を通して,小学校でもローマ字を通して世界の子供達と交流できることがわかった。しかし,円山の子供達も英語を身近に感じ,そして英語を通してコミュニケーションすることができれば,もっと交流の可能性は広がるだろう。

４年生では,このように英語に慣れ親しむ取り組みを加えることになった。

しかし, いきなり英語を書いたり, 話したりできるわけではない。そこで, コンピュータを使って,繰り返し聞くことのできる英語辞典を作成することになった。

■グループのテーマに沿って,言語材料を選ぶ

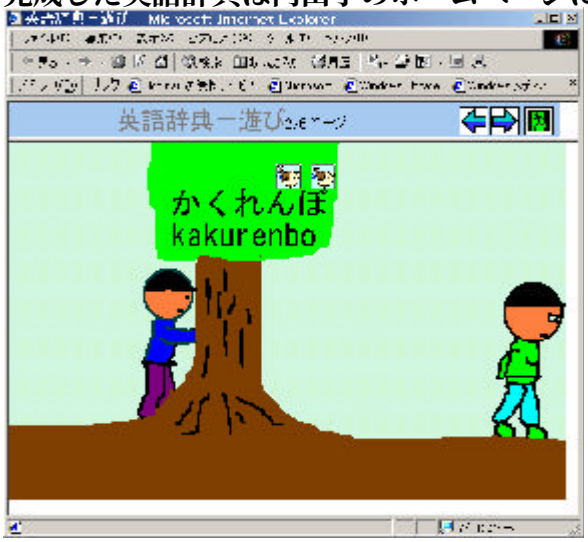
スタディノートを使って英語辞典を作成した。
子供達はそれぞれのグループのテーマに沿って,発音したい内容を選んだ。そして,スタディノートに選んだ内容の絵をかき,日本語とローマ字の文字を書き,サウンドレコーダーで日本語の発音を記録した。

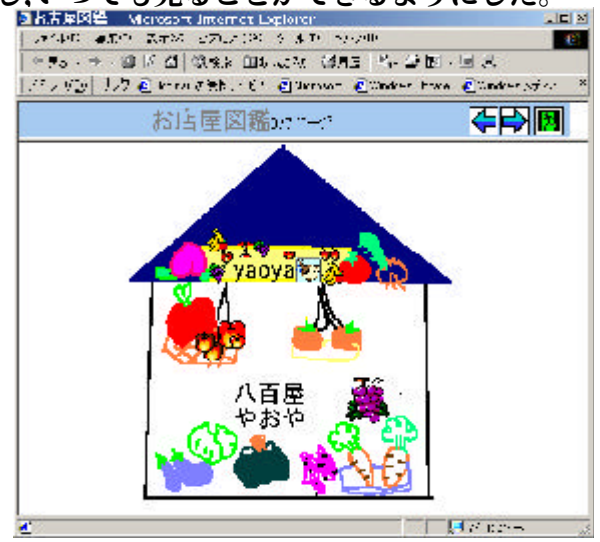
■ＡＬＴの先生に英語を発音してもらう

英語の発音は, ＡＬＴのクレイ先生の協力を得て,コンピュータに記録していった。子供達がグループ毎に作った英語辞典を開いて,サウンドレコーダーを操作した。コンピュータを使った英語辞典にはＡＬＴの先生も興味を示してくれた。また, 子供達自身も,自分達が作った英語辞典にＡＬＴの先生が英語の発音を加えてくれることで,よりいっそう活動への関心が高まったようである。

■完成した英語辞典

完成した英語辞典は円山小のホームページにも掲示し,いつでも見ることができるようにした。



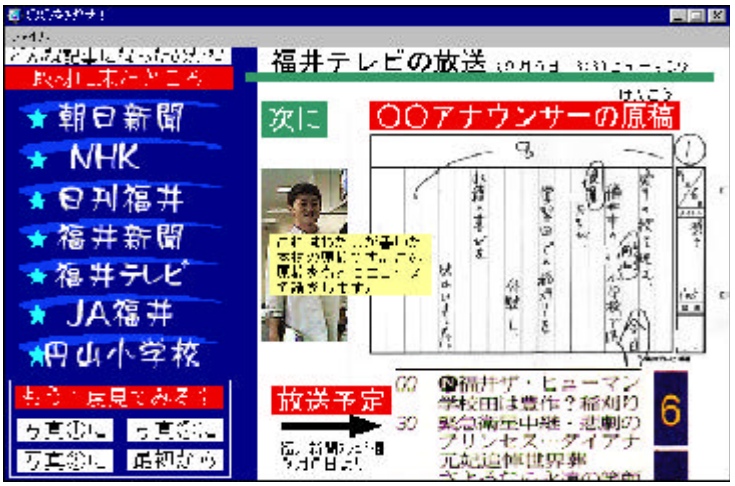


6　今後の展望

最後に本校のメディア･リテラシーの今後の展望を示す。

(1) メディアを読み取る力を高める

本校が実践しているメディアを活用したコミュニケーションの過程で,子供達はメディアを道具として生かし, メディアの識字率は確実に向上している。しかしながら, 拙者が平成９年度に実施したような,メディアの読み取り自体を目的とした学習活動を今一度整理して,全体のメディアスキルやコミュニケーションスキルとして示していく時期にきているように思う。本校では各学年でメディアの識字率を高める取り組みも豊富に行われているので,それを共有の財産としたい。



■ダイアナ妃か稲刈りか

平成９年度　渡邉輝幸

「どうしてせっかく取材した円山小のニュースを中止したのか」という課題を通して, 情報は重要性や緊急性, 地域性, 公共性によって選択していることを読み取る。実は放送が中止されたのは, ダイアナ妃の葬儀, マザーテレサ女史の死去という国際的なニュースと重なったためだった。
自作したマルチメディア教材。ゲーム形式で体験した稲刈りを思い出し, 取材の様子を再現した。

(2) man to environment を視野に入れたメディア環境の整備

メディアを活用したコミュニケーション活動を進めていくと, 教師が持っている知識を子供に注入する学習スタイルには限界がある。コミュニケーションをキー概念に学びのパラダイム転換を進めていく過程は, 学習環境においては, man to man から man to environment への指向を強める。

したがって, メディアの環境整備においても man to environment を具現化するパソコンルーム等のデザインや, 機器, ソフトの整備をしていく必要があるだろう。本校でアルバムと呼んでいるサムネイルソフト(VIX)を活用しているのはその一例である。これは, コミュニケーション活動をつなぐプラットホームとしてのメタファであり, これを通して地域や人, ものへの関わりが深められる。また, 今後はビデオの読み取りや表現活動におけるメディア環境を整備していく必要がある。

(3) 学びの共同体として

５年間勤務してきた円山小でのメディア教育の実践例を紹介してきたが, 初めて円山にきてコンピュータに接する先生も少なくない。しかし, 何年もコンピュータを操作しているからと言って, メディア教育ができるわけではない。現にパソコン歴２ヶ月の先生が, 優れたメディア教育を実践したこともある。なぜなら, その先生が持っていた国語教科のリソースでメディアの特性を読み取り, 学習を構想したからである。他にも算数, 理科, 図工, 音楽等様々なリソースを引き出して, メディアの特性を読み取り実践する先生がたくさんいる。まさに学びのアイデアの宝庫である。そしてそれを共有していく…。さらに子供同士の学び合いはダイナミックで発展的である。メディア教育においても, 学びの共同体として, 正統的周辺参加とでもいうべきか, 関わっていくイメージが重要である。

協力者　　大野木　裕明　　福井大学教育地域科学部
　　村野井　均　　同
　　三　嶋　博之　　同

実施場所　福井市円山小学校

参考資料　円山小研究紀要　平成９年度～12年度
「学校と地域で育てるメディアリテラシー 」
「これが "21世紀の学力 " だ！ メディアリテラシーの提言 総合的学習･情報教育の新しい展開」, 市川克美, 明治図書, 1999年10月